

【漁況】

[マアジ]

1. 漁獲量の動向（農林統計）

全国のマアジの漁獲量は、昭和40年の53万トンにピークに減少傾向となり、昭和55年には5万4千トンとなりました。

その後増加傾向に転じ、平成8年には33万トンに増加し、平成10年までは30万トン台で推移しましたが、再び減少傾向に転じ、平成20年は17万2千トンとなりました。

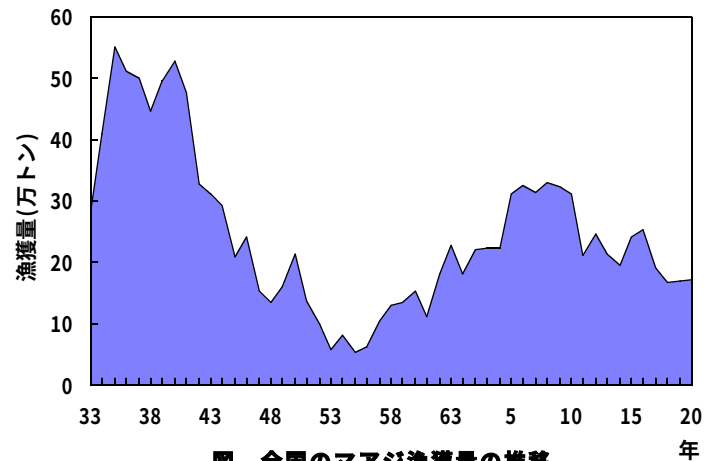


図 全国のマアジ漁獲量の推移

2. 平成22年1～3月期の漁況の経過

【4港計（阿久根；枕崎；山川；内之浦）】

北薩海域では、牛深沖、甑島西に漁場が形成されました。

薩南海域では、立目崎沖、野間池沖に漁場が形成されました。

4港計のまき網では、マアジ豆・小（1歳魚：平成21年生まれ）主体にマアジ小・中（2歳魚：平成20年生まれ）混じりで795トンの水揚げがあり、前年の67%及び平年の59%と低調に推移しました。

3. 平成22年4～6月期の見とおし

漁獲の主体は、マアジ豆・小（1歳魚：平成21年生まれ）主体となるでしょう。

来遊量は、前年・平年を上回るでしょう。

（根拠）

漁獲の主体と来遊量は、現在の漁況経過や近年の漁獲パターンから予測しました。

漁獲主体となるマアジ1歳魚は、0歳時に最近10年では最高の漁獲となったことから、好調な来遊が期待され、前年・平年を上回ると考えられます。マアジ2歳魚は、現在までのまき網での漁獲状況から、低調な前年は上回ると考えられます。

総合的に判断すると、前年・平年を上回ると考えられます。

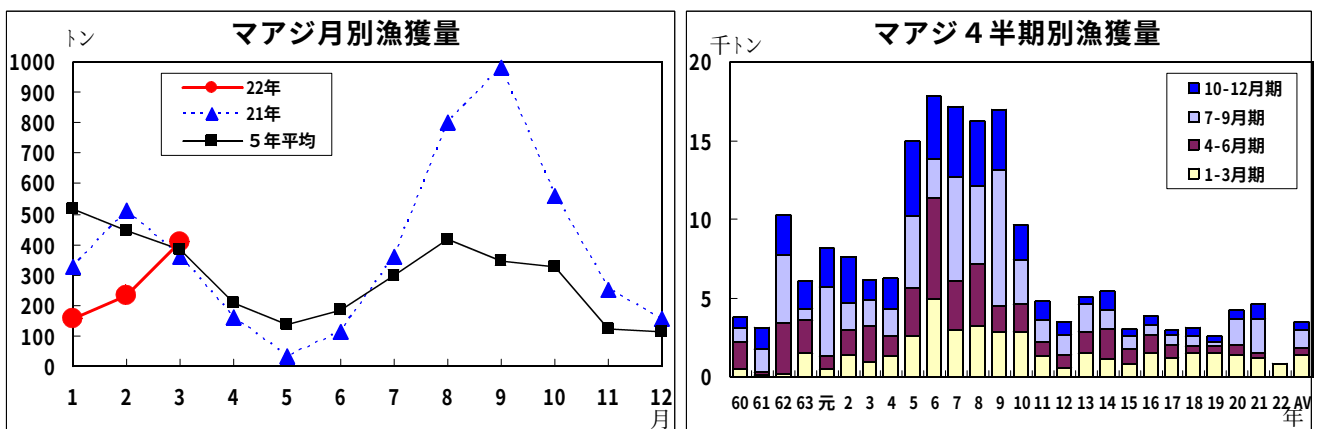


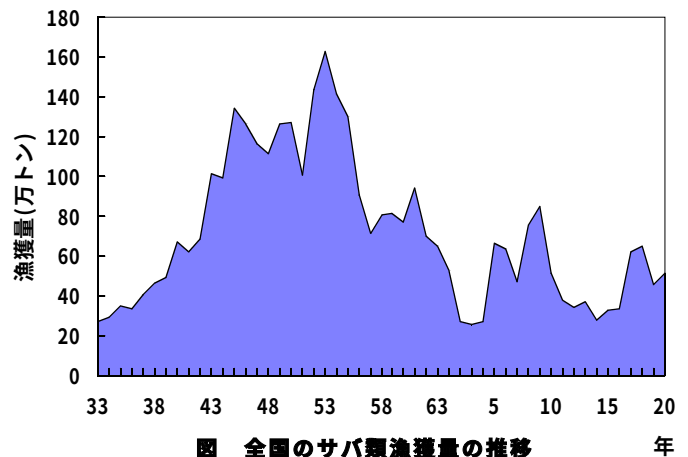
図 マアジまき網漁獲量変化(4港計)

※平年値は過去5年（平成17～21年）の平均値(AV)、3月は平成22年3月24日までの水揚量を使用。

[サバ類]

1. 漁獲量の動向（農林統計）

サバ類の漁獲量は、昭和53年の160万トン进行ピークにマサバ資源水準の低下により年々減少し、昭和57年には72万トンとなりました。その後は、ゴマサバの増加により大幅な漁獲量の減少は見られませんでした。昭和63年以降はゴマサバの資源水準も低下したため、サバ類の漁獲量は大きく減少し、平成3年には26万トンとなりました。平成5年から増加に転じ平成9年には84万9千トンまで増加しましたが、その後減少し平成14年は27万9千トンになりました。平成17年から再び増加し平成20年は51万4千トンとなりました。



2. 平成22年1～3月期の漁況の経過

【4港計（阿久根；枕崎；山川；内之浦）】

北薩海域では、まとまった漁場は形成されませんでした。

薩南海域では、種子島東、島間沖に漁場が形成されました。

4港計のまき網では、ゴマサバ中(3歳魚以上：平成19年生まれ以上)主体に1,431トンの水揚げで、前年の41%及び平年の36%と非常に低調な漁模様となりました。

3. 平成22年4～6月期の見とおし

漁獲の主体は、ゴマサバ中（3歳魚以上：平成19年生まれ以上）となるでしょう。

来遊量は前年・平年を下回るでしょう。

（根 拠）

漁獲の主体と来遊量は、現在の漁況経過や近年の漁獲パターンから予測しました。

ゴマサバ1歳魚は、薩南海域では今期の主対象にはなりません。ゴマサバ2歳魚は、太平洋系群の加入状況が悪く前年を大きく下回ると考えられます。ゴマサバ3歳魚は、前年から漁獲の主体となっていて、今期も前年を上回る来遊があると考えられます。4歳魚以上は、漁獲の主体とはなりません前年並みの混じりが期待されます。

総合的に判断して、前年・平年を下回ると考えられます。

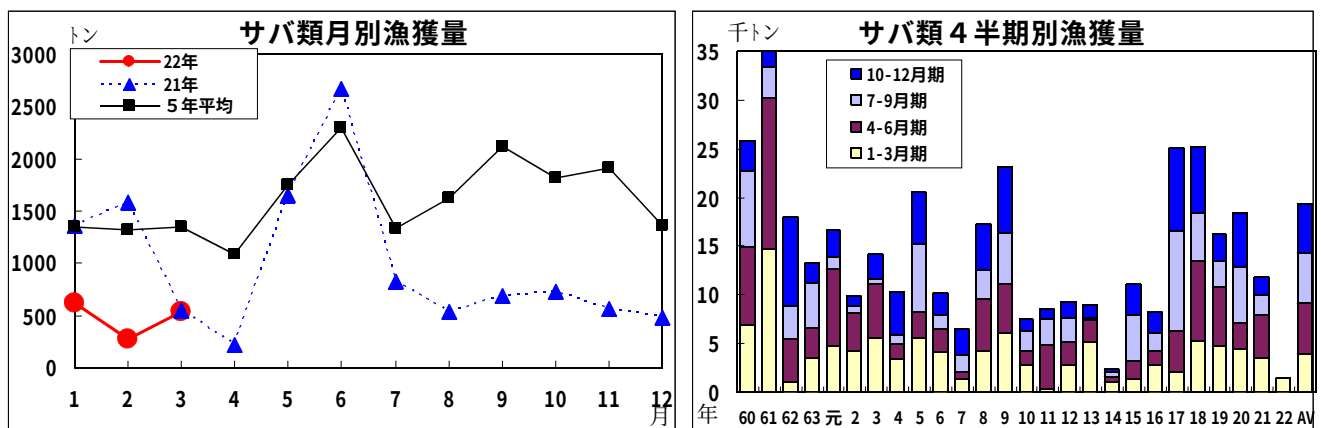


図 サバ類まき網漁獲量変化(4港計)

※平年値は過去5年（平成17～21年）の平均値(AV)、3月は平成22年3月24日までの水揚げ量を使用。

[マルアジ（アオアジ）]

1. 漁獲量の動向

マルアジの漁獲量は、昭和62年から平成元年に1,500トンを超えるピークがあり、その後低調に推移し、平成12年から15年に再度ピークを迎え15年には3,150トンと最高を記録しました。平成16年以降は低調に推移し、20年は330トンとなりました。

2. 平成22年1～3月期の漁況の経過

1月に野間池沖に2日間のみ漁場が出来て、期全体で98トンの水揚げで、前年の294%及び平年の64%でした。

3. 平成22年4～6月期の見とおし

漁獲の主体は、マルアジ中（2歳魚以上：平成20年生まれ以上）でしょう。

来遊量は前年並みで平年を下回るでしょう。

（根 拠）

漁獲の主体と来遊量は、現在の漁況経過や近年の漁獲パターンから予測しました。

マルアジ中(2歳魚以上)は、現在まで非常に低水準で経過していることから低水準の前年並みで平年を下回ると考えられます。

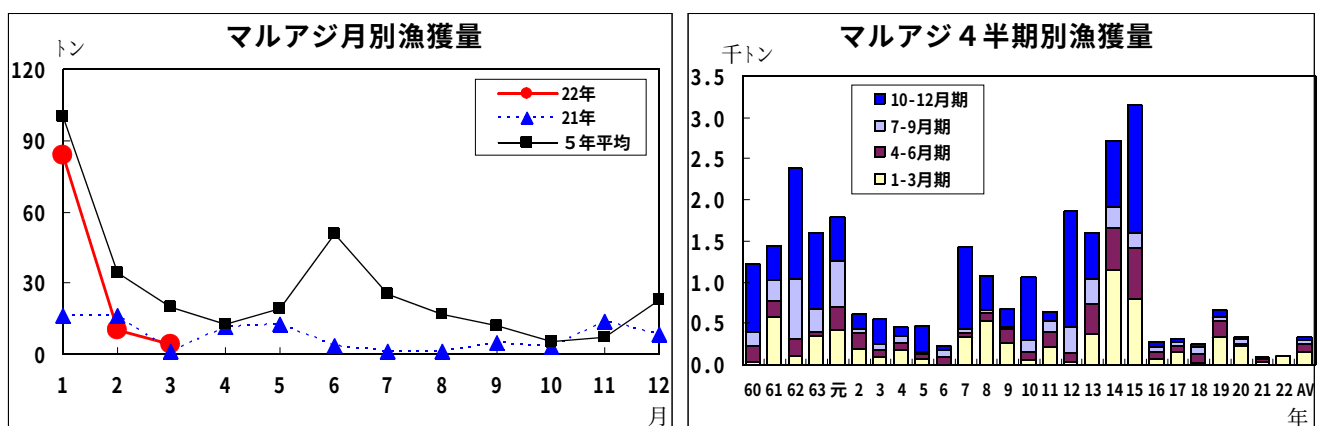


図 マルアジ（アオアジ）まき網漁獲量変化(4港計)

※平年値は過去5年（平成17～21年）の平均値(AV)、3月は平成22年3月24日までの水揚げ量を使用。

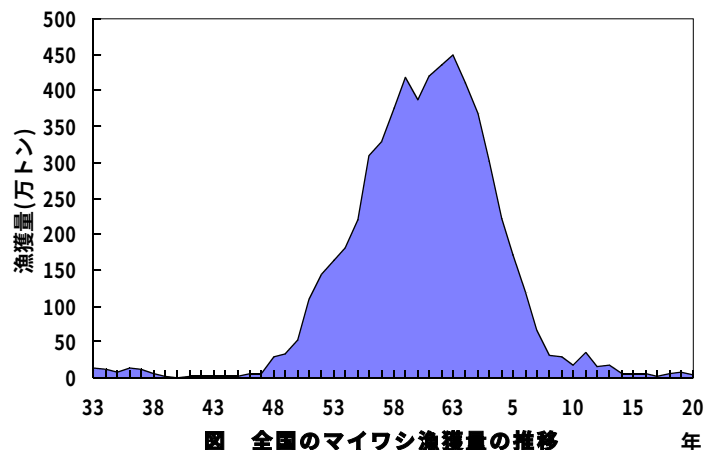
[マイワシ]

1. 漁獲量の動向（農林統計）

全国のマイワシの漁獲量は、昭和30年代から40年代にかけての不漁期の後、昭和48年頃から増加の傾向が見られ、昭和63年には449万トンまで増加しました。

しかし、平成元年から三陸沖を中心に漁獲量が減少し始め、その後もマイワシの若齢魚の減少等により、全国的に漁獲量は減少を続け、平成7年には66万トン、平成10年は16万7千トンとなりました。

その後さらに減少し平成14年は5万トンとなり、以降横ばい傾向で平成20年は3万8千トンとなっています。



2. 平成22年1～3月期の漁況の経過

【4港計（阿久根；枕崎；山川；内之浦）】

北薩海域及び薩南海域の沿岸域でウルメイワシに混じって漁獲されました。

4港計のまき網では中羽（1歳魚：平成21年生まれ）主体に18.3トンの水揚げで前年の2002%、平年の26%となりました。北薩海域の棒受網は、47.9トンの水揚げで前年の25463%、平年の685%となりました。

3. 平成22年4～6月期の見とおし

漁獲の主体は中羽（1歳魚：平成21年生まれ）でしょう。

来遊量は前年を上回り平年を下回るでしょう。

（根 拠）

今期は産卵親魚群が漁獲の対象となります。

前期漁獲された1歳魚（平成21年生まれ）が、引き続きウルメイワシに混じって漁獲される程度と考えられます。

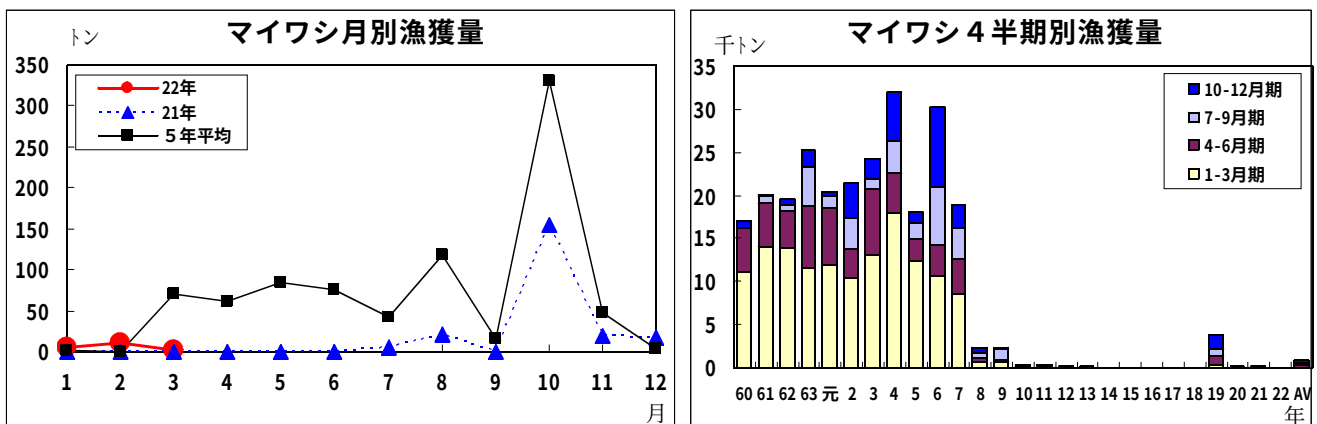


図 マイワシまき網漁獲量変化(4港計)

※ 平年値は過去5年（平成17～21年）の平均値(AV)、3月は平成22年3月24日までの水揚量を使用。

[ウルメイワシ]

1. 漁獲量の動向（農林統計）

全国のウルメイワシの漁獲量は、昭和30年代後半から40年代前半にかけて3万トン前後で推移していましたが、昭和46年から54年まで5万トン前後で推移しました。昭和55年以降、漁獲量は減少し昭和60年には3万トンとなりました。その後、増減を繰り返しながら増加傾向を示し、平成6年に6万8千トンとなりました。その後減少傾向に転じ、平成12年は2万4千トンとなりましたが、近年は増加傾向となり、平成20年は4万8千トンでした。

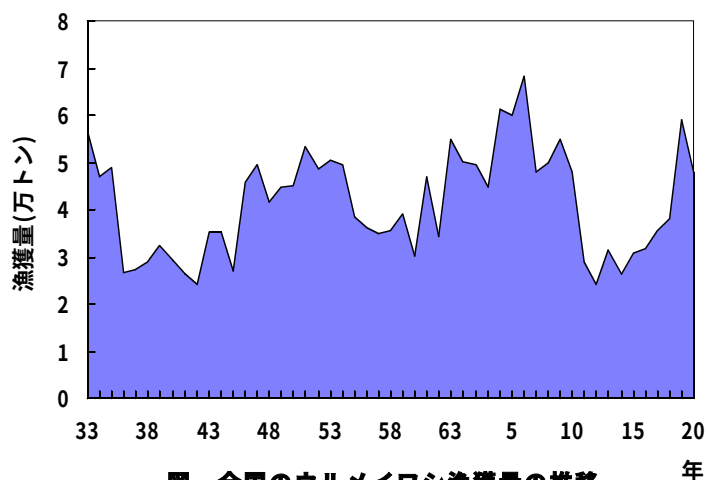


図 全国のウルメイワシ漁獲量の推移

2. 平成22年1～3月期の漁況の経過

【4港計（阿久根；枕崎；山川；内之浦）】

北薩海域では、縄瀬沖に漁場が形成されました。

薩南海域では、立目崎沖から野間池沖に漁場が形成されました。

4港計のまき網では、中羽（1歳魚：平成21年生まれ）主体に大羽（2歳魚：平成20年生まれ）混じりで779トンの水揚げがあり前年の155%、平年の197%と好調な漁模様となりました。北薩海域の棒受網でも、中羽（1歳魚：平成21年生まれ）主体に大羽（2歳魚：平成20年生まれ）混じりで295トンがあり前年の275%、平年の513%と好調な漁模様となりました。

3. 平成22年4～6月期の見とおし

まき網では、中羽（1歳魚・平成21年生まれ）主体になるでしょう。棒受網では小羽（0歳魚・平成22年生まれ）主体になるでしょう。来遊量は前年・平年を上回るでしょう。

（根拠）

漁獲の主体と来遊量は、現在の漁況経過や近年の漁獲パターンから予測しました。

今期漁獲の主体となる中羽（1歳魚：平成21年生まれ）は、加入状況が非常に良好であったことから、引き続き漁獲対象となり前年・平年を上回る来遊が期待されます。

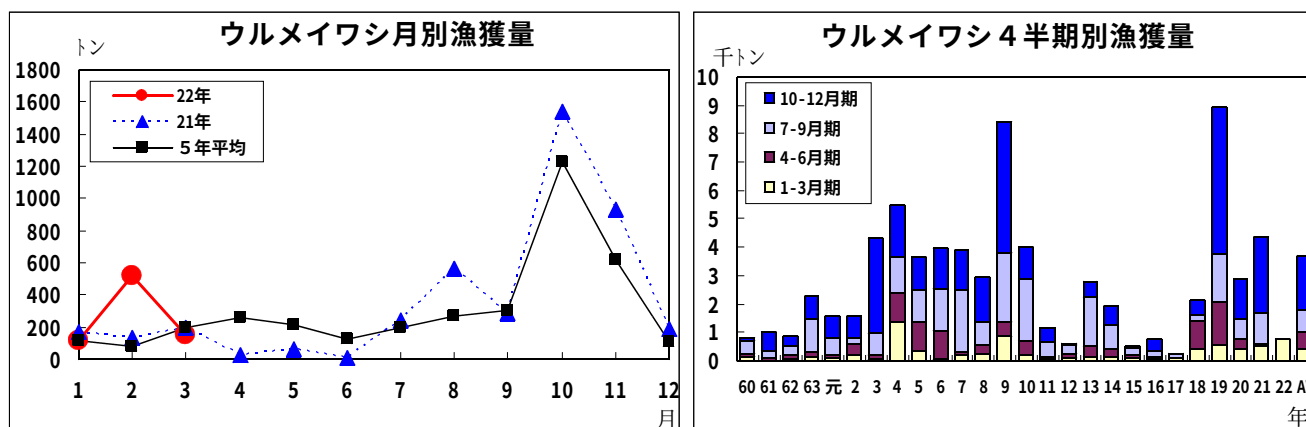


図 ウルメイワシまき網漁獲量変化（4港計）

※ 平年値は過去5年（平成17～21年）の平均値（AV）、3月は平成22年3月24日までの水揚量を使用。

[カタクチイワシ]

1. 漁獲量の動向（農林統計）

カタクチイワシの漁獲量は、昭和48年まで30万トン台で変動していましたが、昭和49年以降減少傾向となり昭和54年には13万トンとなりました。その後、徐々に漁獲量は増加し昭和59年には22万トンとなりましたが、昭和62年には再び14万トンまで減少しました。昭和63年以降は大きく増減を繰り返し、平成13年は30万トン、平成14年は44万トンでした。平成15年は過去最高の53万5千トンとなりましたが、その後減少傾向に転じ、平成20年は34万5千トンとなりました。

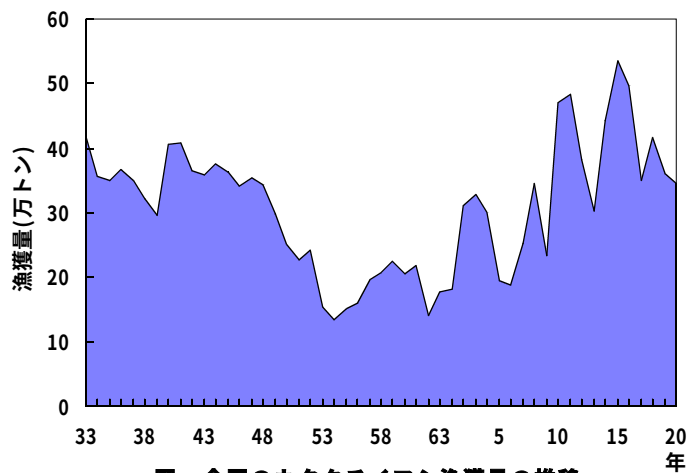


図 全国のカタクチイワシ漁獲量の推移

2. 平成22年1～3月期の漁況の経過

【4港計（阿久根；枕崎；山川；内之浦）のまき網及び棒受網】

鹿児島県4港のまき網では509トン(前年比24,580%, 平年比76%)と不漁であった前年は大幅に上回りましたが、平年は下回り、北薩海域の棒受網では88トン(前年比190%, 平年比52%)と、前年は上回りましたが、平年は下回りました。

3. 平成22年4～6月期の見とおし

期間の前半は大羽銘柄(1歳魚・平成21年生まれ)が漁獲の主体で、後半は小中羽銘柄(0歳魚・平成22年生まれ)が漁獲の主体となり、来遊量は前年を上回り平年並みとなるでしょう。

(根 拠)

年明け以降の大羽群の来遊が昨年よりは好調だったことから、ある程度の来遊は期待され、前年を上回り平年並みと考えられます。

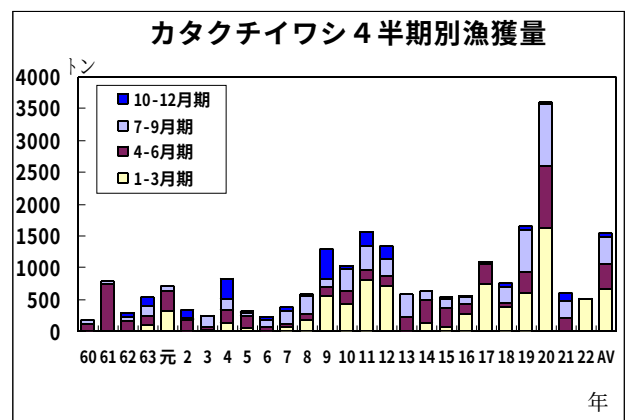
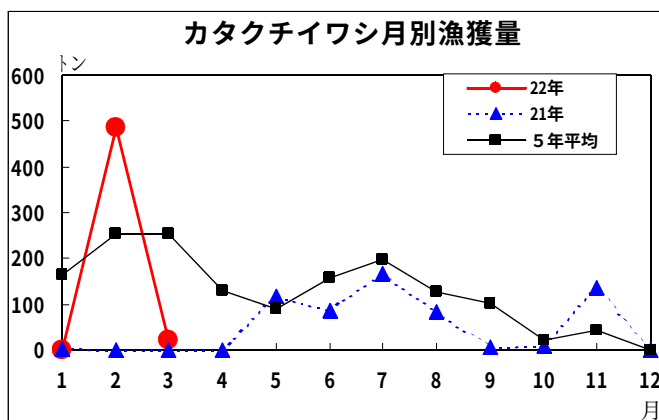


図 カタクチイワシまき網漁獲量変化(4港計)

※平年値は過去5年(平成16～20年)の平均値(AV)、平成22年3月24日までの水揚量を使用。

[イワシ類参考資料]

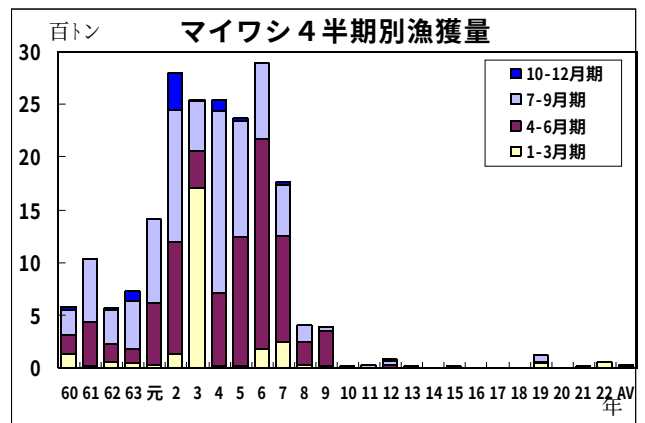
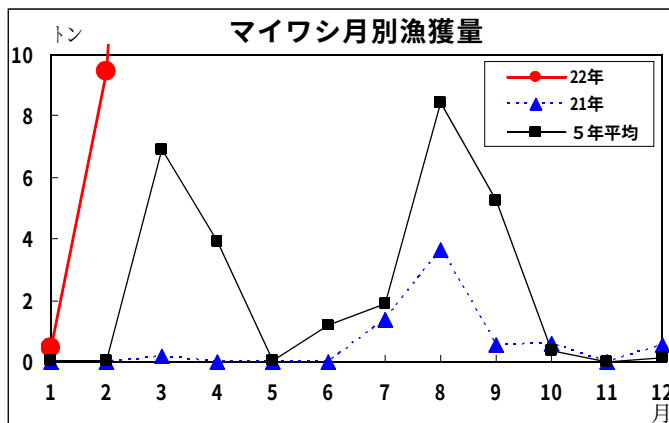


図 マイワシ敷網漁獲量変化(阿久根港)

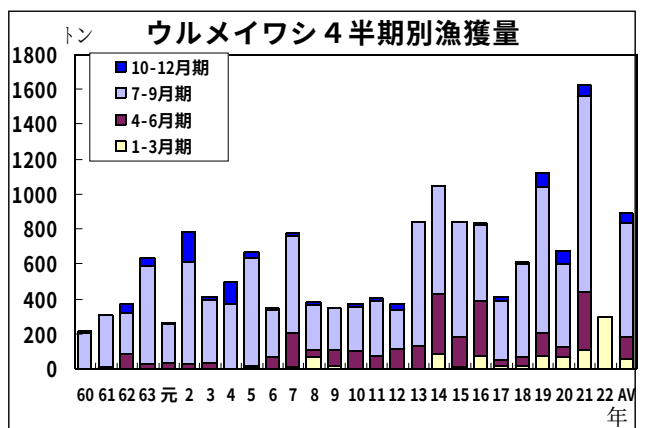
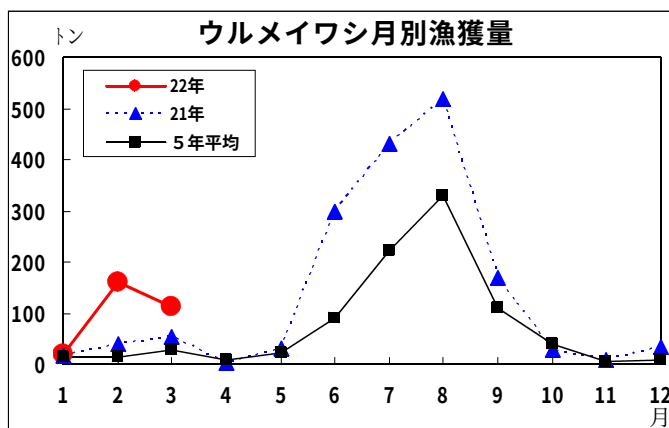


図 ウルメイワシ敷網漁獲量変化(阿久根港)

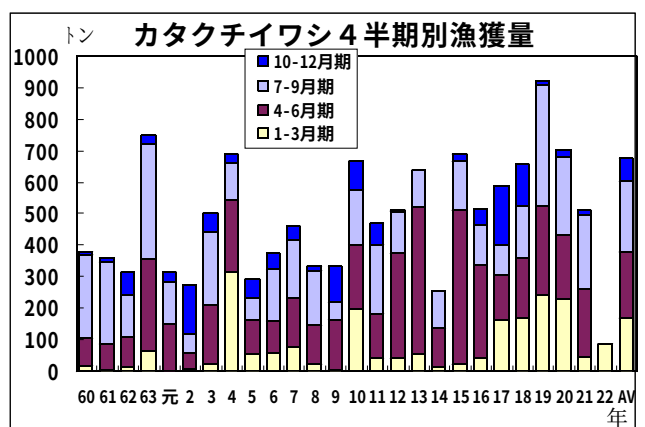
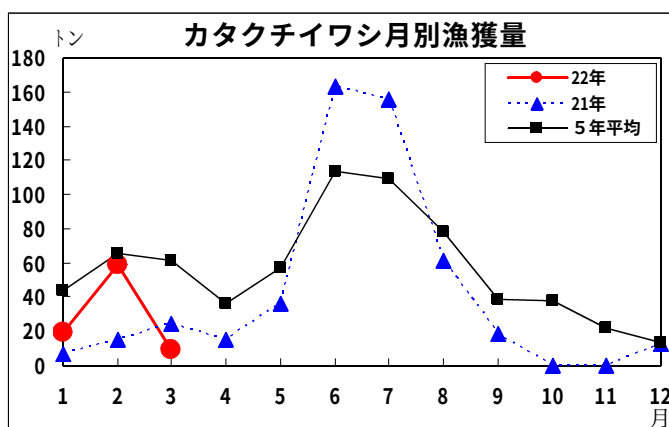


図 カタクチイワシ敷網漁獲量変化(阿久根港)

※ 平年値は過去5年（平成17～21年）の平均値(AV)，3月は平成22年3月24日までの水揚量を使用。

[参考：漁況経過のみ記載]

〈ムロアジ類（クサヤモロ、モロ）（4港計）〉

1. 経年変化及び平成21年10～12月期の漁況の経過

ムロアジ類の漁獲量は、平成2年の21,700トン进行ピークに急減し、平成6年以降は、1,500トンから4,500トンの間での推移となっています。平成21年は2,803トンとなりここ4年間横ばいとなりました。

平成22年1～3月は、薩南海域でクサヤモロ（銀ムロ）主体の漁獲があり、期全体では793トンの水揚げで、前年の127%及び平年の166%となりました。

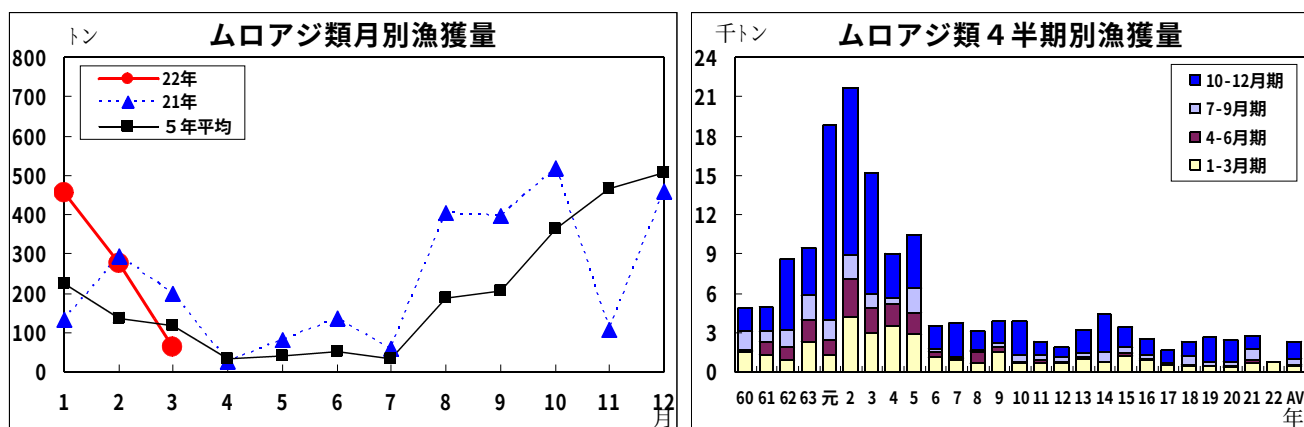


図 ムロアジ類まき網漁獲量変化(4港計)

※平年値は過去5年（平成17～21年）の平均値(AV)、3月は平成22年3月24日までの水揚量を使用。

〈オアカムロ（4港計）〉

1. 経年変化及び平成22年1～3月期の漁況の経過

オアカムロの漁獲量は、平成元年の5,300トン进行ピークに一端減少し、平成7年に4,400トンと再度ピークを迎えた後は減少傾向となっていました。平成20年は2,291トンと前年・平年を上回り、平成21年も前年は下回りましたが、平年並みとなりました。

平成22年1～3月は、薩南海域で漁獲があり、期全体では427トンの水揚げで前年の91%及び平年の80%と低調な漁模様となりました。

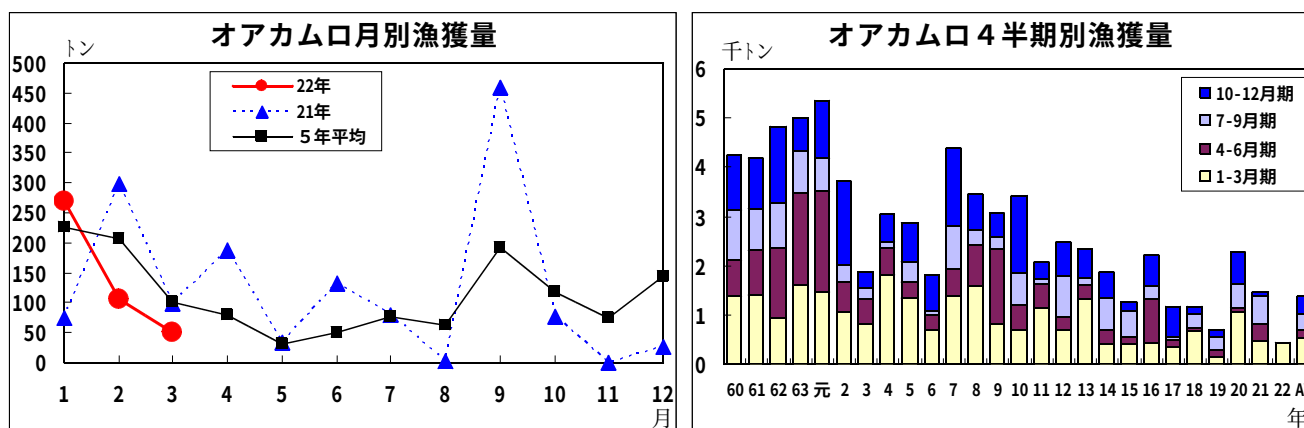


図 オアカムロまき網漁獲量変化(4港計)

※平年値は過去5年（平成17～21年）の平均値(AV)、3月は平成22年3月24日までの水揚量を使用。